

冬が終わり、始まる春に

荻原 純子 福島県福島市 三十三歳

おばあちゃん。

あなたの庭を思いながら、この手紙を書いています。
覚えていますか？

春は苺。夏は山桃。秋の柘榴がはぜる頃、緑の庭は紅葉に染まっていきました。
私は、よく覚えています。

子どもの頃、小腹が空くと、よくあなたと庭へ出て実を摘みました。

「お庭にね、一つでも食べられるものがあると安心するの」
それは戦争を経験したあなたの口癖であり、哲学でした。

おばあちゃん。

あの日、三月十一日。

震災と共に訪れた原発事故が、福島の間もかもを変えてしまいました。

「もう、全部、食べられないわね」

庭を見渡して、呟いたあなたの声は震えていました。

手塩にかけて育てた食べ物を、自らが棄てなければならぬ。それがあの頃の福島でした。
食のありがたみを知るあなたならば、その苦しみは尚更だったでしょう。

今、福島はゆっくりと冬を終えようとしています。

この地で育まれた食物たちが、また少しずつ世界へ受け入れられ始めているのです。

「お庭にね、一つでも食べられるものがあると安心するの」

おばあちゃん。

食べ物を与えること。それが、飢えの辛さを知るあなたの最大の愛情なのだと気づいたの
は、私が親になってからでした。

子どもたちを連れて、近々伺います。

あなたの曾孫たちが、あの庭を駆け回ります。

苺の苗を持っていきますね。

植え方を教えてください。

福島を訪れる春、また一緒に苺を摘みましょ。